

博物館と学校教育の連携（２）

－「博学融合」の試み－

渡 辺 勤

はじめに

生涯学習審議会は、「地域における生涯学習機会の充実方策について（答申）」（平成８年４月２４日）のなかで、学校教育と社会教育の関わりについて、

「学社融合は、学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提とした上で、そこから一歩進んで、学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら、一体となって子供たちの教育に取り組んでいこうという考え方であり、学社連携の最も進んだ形態と見ることもできる」

と明言し、「学社融合」の理念に立った事業展開を提唱している。答申は、「それぞれの施設が、学校との連携・協力を図りつつ、学校教育の中で活用しやすいプログラムや教材を開発し、施設の特徴を生かした事業を積極的に展開していくことが重要である」と続けている。

「学社融合」を博物館施設にあてはめるならば「博学融合」となる。辞書によると「融合」とは「組織などが合一すること」とある。「博学融合」とは、博物館等と学校が、つまりは博物館等職員と教師が連携・協力し、一緒になって子供たちの教育にあたるということである。

そこで本年度は、「博学融合」の試みとして、学校の協力のもと授業に一步踏み込ませていただいた。具体的には、社会科の授業において、学校へ出向いたり（「出前授業」）、当館を授業の場とし、担当教師とともに展開した。いわゆるティーム・ティーチングに関わったのである。

本稿は、その試みの一端を紹介することによって、学校と博物館等が「博学融合」の望ましい在り方について追究する場を提供することを目的としている。

１ 「出前授業」

生涯学習時代を迎えた今日、その基礎づくりの場としての学校教育には、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を目指し、新しい学力観に立った教育活動の展開が強く求められている。とりわけ実物を見たり、触れたり、操作したり、作ったりといった体験的な学習が重視されている。そうした体験的な学習の機会を子供たちに提供することは博物館等の重要な役割である。当館においても、教育普及事業として、考古及び民俗に関する多種多様な体験的な学習の場を提供している（当館



まが玉作りに挑戦

『調査研究報告』第9号参照)。

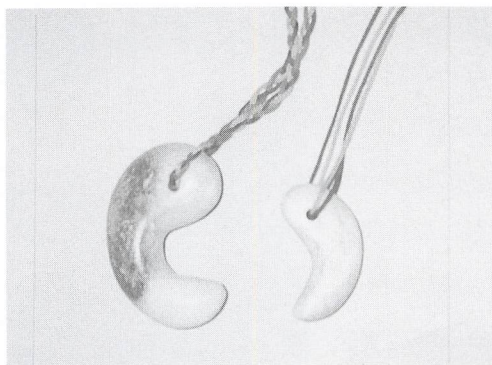
しかし、博物館等の体験的な学習を学校全体で、あるいは学年・学級単位で実施することは物理的に困難な場合が多い。そこで、館側から直接学校を訪問し、授業を展開あるいは授業に協力する「出前授業」を実施した。社会科の授業や文化祭における「はにわ作り」(3校)や「まが玉作り」(5校)などの体験的な学習に関わったのである。

具体的には、製作に入る前に、持参した埴輪や勾玉をもとに、用意したしおりを使って、埴輪の種類や役割、勾玉をはじめとする副葬品についてスライド等を用い説明を加え、その後製作を行った。担当教師が事前に体験し、製作段階で子供たちに直接指導を行った中学校もあった。この場合より効果的であったことはいうまでもない。

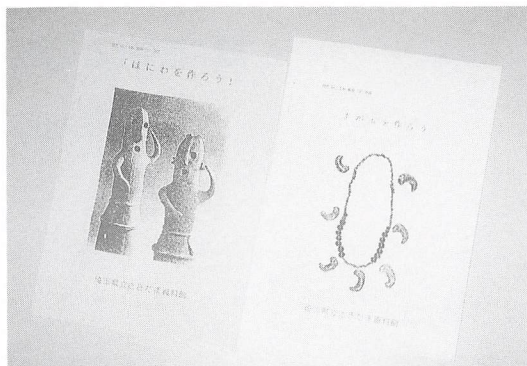
どの学校の子供たちも目を輝かせ一生懸命に取り組んでいた。越谷市の小学校の児童たちは、自分で作った勾玉を自慢げに首に掛け下校していったという。北本市の中学校の生徒は、「もっといい物を作りたい」と勾玉の材料であるろう石の入手方法を求めてきた。行田市の中学校の生徒は、学習後、家庭へ持ち帰って作り上げた勾玉を見せるために休日に来館した。また、埴輪作りに挑戦した騎西町の小学校の児童たちは、思い思いの個性豊かな埴輪を作り、夏の暑い太陽が照り付けるなか野焼きを実行し、全員みごとに焼き上げた。焼き上がった自分の埴輪に子供たちは満足感でいっぱいであった。いずれにせよ自分で作った作品は世界でたった一つであり、子供たちにとって貴重な宝物である。子供たちはその製作過程において、古代人の心をも学ぶとともに、歴史にに興味関心を持ち、学習意欲を一層高めてくれたものと考えている。

「出前授業」は、かなりの効果が期待できる。しかし、当然「出前授業」にも限界があり、県立館の難しさがある。そこで、来年度からは、学校の先生方に埴輪や勾玉の製作技術等を学んでいた

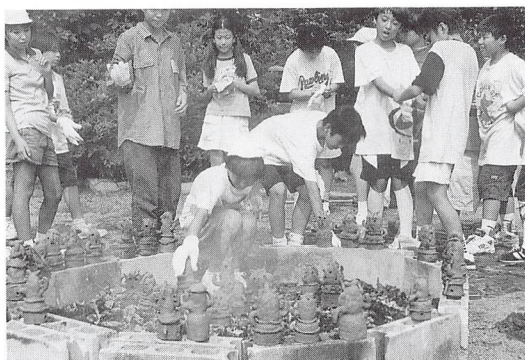
だき、学校の授業の中で実施することができるよう教師対象の体験学習講座を実施していく予定である。



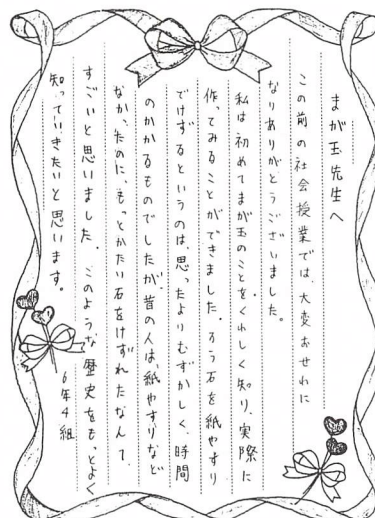
児童が作ったまが玉



体験学習のしおり



はにわの野焼きに挑戦



児童から寄せられた感想

2 当館を授業の場とした実践

学習指導要領の「内容の取り扱い」には、次のように明示されている。

・小学校社会科

「指導計画の作成に当たっては、博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行われるよう配慮する必要がある」

・中学校社会科

「日本人の生活や生活に根ざした文化については、各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な歴史とも関連づけて指導するとともに、博物館や郷土資料館等を活用した文化財の見学・調査を通じて、生活文化の発展を具体的に学ぶことができるようにする。

このように今日の社会科の授業においては、観察や見学・調査等の体験的な学習が重視されており、とりわけ博物館や資料館等の積極的な活用が求められている。

その博物館や資料館等を見学により活用する場面には、次の3つが考えられる。

①単元の導入段階で見学

(学習課題をつくる)

見学の目標、方法等について話し合う

博物館等を見学し、学習課題をつくり、解決への見通しを立てる

学習課題を教科書や資料、再度の見学等によって調べる(追究する)

学習課題を解決し、まとめる

②単元の展開段階で見学

(学習課題を追究する)

教科書や資料等をもとに学習課題をつくる

見学の目標、方法等について話し合う

博物館等を見学し、学習課題について調べる(追究する)

見学して調べたことをもとに、学習課題を解決し、まとめる

③単元のまとめの段階で見学

(学習課題を解決し、まとめる)

教科書や資料等をもとに学習課題をつくる

学習課題を教科書や資料等をもとに調べる(追究する)

見学の目標、方法等について話し合う

博物館等を見学し、学習課題を解決し、まとめる

必要によって、これらを組み合わせて授業を展開することになる。

いずれにしても博物館等の見学は、年間指導計画にしっかりと位置付け、生徒の実態を踏まえ、評価規準を明確にし、計画的に実施されなければならない。生徒の実態としては、特に発達段階を4つの観点(関心・意欲・態度、思考・判断、資料活用の技能・表現、知識・理解)からとらえ、博物館等を見学することによってどんな資質・能力を身に付けさせたいか、また伸ばしたいのかを明確にするとともに、生徒の博物館等の利用状況等(特に博物館等との関わり)を十分に踏まえることも重要であろう。その上で博物館等をどの段階で活用するかが決まってくるものと考え。実

践する上では、博物館等の職員との綿密な打ち合わせが不可欠であることはいうまでもない。

ここでは、当館を実際の授業の場として活用した実践例2つについて述べる。

(1) 小学校第6学年（川里村立屈巢小学校）の実践

これは、「地域の教材を活用して、生き生きと活動する児童を育てるための指導の工夫」をテーマに、小単元「米づくりのむらから古墳のくにへ」において行われたものである。

川里村立屈巢小学校の第6学年は、2学級からなる。この実践は、学級の枠を取り払い、2人の教師が指導に当たるいわゆるティーム・ティーチングとして展開された。当館としてもそのティーム・ティーチングの一翼を担ったといえる。

まず、事前打ち合わせのため先生方に来館していただき、本実践のポイントやねらい等の説明を受けた。その後、指導計画等について先生方とともに検討した。特に当館を見学する場面や子供たちへ対応（見学時の説明の程度、資料の提供、見学後の対応等）について打ち合わせた。本実践のポイントやねらい、指導計画等については以下の通りである。

1 実践のポイント

(1) 児童が主体的に学習活動に取り組める学習過程の工夫

- ・身近な地域にある、埼玉古墳群や県立さきたま資料館を見学、調査する活動を取り入れた学習過程の工夫
- ・学習過程における子供たちの歴史的な見方・考え方を援助する博物館職員などの人材を活用した指導の工夫
- ・見学・調査活動、表現活動などの体験的な活動の工夫

(2) 地域の人材が登場する歴史学習

- ・稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣に記されている「ヲワケの臣」を手掛かりにした教材の開発
- ・地方の豪族や古墳を中心とした学習により、中央政府との関わりをとらえる教材開発

2 小単元のねらい

米づく作りが始まったころの様子や「むら」や社会の様子が大きく変わったこと、「むら」や「くに」が大和朝廷によって統一されていったことを、遺跡や出土品、想像図などから調べ、当時の人々のくらしの様子について考えることができるようにする。

3 評価規準

評価の観点	評価規準
社会的事象への 関心・意欲・態度	人々の生活や社会の様子の急激な変化に関心を持ち、その背景や米づくり、国土の統一の様子を自ら意欲的に調べることができる。
社会的な思考・判断	「むら」の様子の変化から、米づくりと人々の生活や社会の変化の関連について考えることができる。
観察・資料活用の 技能・表現	様々な資料や遺跡、出土品などから、当時の人々の生活の様子を想像し、自分なりに表現することができる。

社会的事象についての 知識・理解	米づくりの技術や大陸からの文化の広がりや人々の生活や社会に変化をもたらし、やがて大和朝廷によって国土が統一されていったことを理解することができる。
---------------------	---

4 小単元の指導計画・評価計画

	主な学習活動・内容	支援と評価	資料
つ か む	①米づくりが始まったころの様子と米づくりが広がったころの様子の想像図を比べて違いを考える。 ・集落や水田などの違い ・古墳の有無	〈資〉想像図からいろいろなことを発見することができる。 ○縄文時代との違いを考えながら、児童の「気づき」を大切にす。	〈絵〉 弥生時代と古墳時代の想像図
	米づくりをするようになって、人々のくらしはどのように変わったのだろう。		
調 べ る	②弥生時代と古墳時代の概略を年表や想像図などを活用して調べる。 ・米づくりの広がりや意義 ・米づくりの様子 ・邪馬台国の様子 ・大和朝廷による統一	〈知〉米づくりの様子や「むら」同志の争いから、大きな豪族や王が生まれたことをとらえることができる。 〈思〉米づくりが、生活全般への転換のきっかけになったことを考えることができる。 ○米づくりにより、経済的な貧富の差が生じてきたことをおさえる。	登呂遺跡の想像図 吉野ヶ里遺跡の写真 邪馬台国の女王卑弥呼の絵
	③大きな古墳が造られたことを知り、「さきたま古墳群」と「さきたま資料館」を見学する計画を立てる。 ・古墳の大きさ ・古墳に葬られた豪族 ・古墳の副葬品 ・当時の人々のくらし ・大和朝廷とのつながり ・中国・朝鮮とのつながり	〈知〉全国に古墳があることから、日本各地に豪族がいたことがわかる。 〈関〉人々の生活や社会の様子の変化に興味・関心を持ち、進んで調べる意欲を持つ。 〈思〉自分で調べようとする問題をあ程度考えることができる。 ○古墳の大きさやその分布などに対する児童の驚きを大切に、学習意欲に結び付ける。 ○学校の近くにも「さきたま古墳群」があることや、「さきたま資料館」を見学することを知らせる。	二子山古墳の写真 稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣の写真

調 べ る	<p>④⑤「さきたま古墳群」や「さきたま資料館」を見学する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さきたま資料館職員の話 ・課題意識をもって見学する ・「さきたま古墳群」の見学 	<p>〈関〉身近な地域の遺跡や遺物に関心をもち、意欲的に見学することができる。</p> <p>〈資〉自分で調べたい課題をはっきりとつかむとともに、課題解決への見通しを持ち、必要な資料を収集することができる。</p> <p>○事前の打ち合わせを密にしておく。</p> <p>○最初に全体で説明を聞き、その後各自見学をしながら、調べたい課題を明確につかむとともに、課題解決への見通しを持てるようにする。</p> <p>○分からないことは、資料館職員に聞いてもよいことを知らせておく。</p>	<p>さきたま資料館職員 さきたま資料館 さきたま古墳群</p>
	<p>⑥⑦見学をもとに、自分の課題について、自分なりの方法でまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古墳の大きさ ・古墳に葬られた豪族（ワケの臣） ・金錯銘鉄剣 ・渡来人によって伝えられた文化 ・大和朝廷とのつながり ・当時の人々の生活 <p>※古代劇「さきたま物語」の準備</p>	<p>〈資〉〈技〉調べたことをもとに、自分なりの表現方法でまとめることができる。</p> <p>○古墳の一般論として調べるのではなく具体的な事例（さきたま古墳群）を通して、まとめるよう助言する。</p> <p>○課題が解決できないときやより詳しく調べたいときは、放課後や休日等に、さきたま資料館へ行って、職員からアドバイスを得てもよいことを知らせる。</p> <p>〈関〉〈技〉古代劇に意欲的に取り組み、古墳時代の人々を表現できる。</p> <p>〈知〉シナリオ作りや小道具の製作、劇の練習を通し、理解を深めることができる。</p> <p>○希望により古代劇グループをつくり、古代劇の準備をする。</p>	<p>さきたま資料館職員 さきたま資料館</p>
ま と め る	<p>⑧調べたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代劇による発表 ・模造紙による発表 ・新聞による発表 ・紙芝居による発表 	<p>〈技〉発表を工夫し、分かりやすく発表することができる。</p> <p>〈思〉当時の人々の生活の様子をとらえ自分の見方考え方を深めようとする。</p> <p>○まとめ方の種類ごとに発表する。</p>	<p>発表資料</p>

実践にあたっての当館の役割は、当館を学習の導入段階において見学することから、まず子供たちに「古墳文化」に興味・関心を持たせ、自らの課題を持たせること、またその後の学習活動への意欲化を図り、課題解決への見通しを持たせること、そして子供たちが課題を解決する上での支援をすることであった。これは先に述べた博物館や郷土資料館等を見学により活用する場面の①と②に当たる。

見学における館側からの説明は、子供たちが興味・関心を持ち、「疑問」を持つことを第一とした。例えば、「埴輪から、古墳時代の人々のくらしを発見してみよう」という投げ掛けに、子供たちは形象埴輪を食い入るように見ながら、

「この埴輪は、琴を弾いている」

「こっちの埴輪は、踊っているよ」

「この人の髪形へんだなあー」

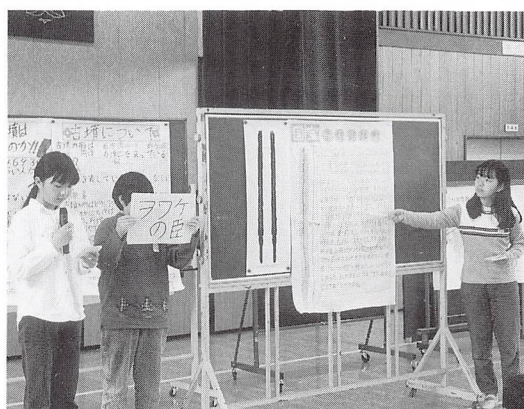
「この2つの家、作りが違うよ」

などと呟いていた。子供たちは、発見から様々な疑問を持ってくれた。そして、子供たちがつくった課題は、「どうして人や、家や、動物の埴輪を並べた?」「なぜ鍵穴型の古墳?」「どのように大きな古墳を造った?」「なぜ副葬品を?」「ヲワケとはどこのどういう人?」等々様々であった。見学の目的は達成されたようである。

その後、子供たちはグループを編成し自分たちの課題解決に向け、見学当日収集した資料や学校の図書室等の資料をもとに、さらには放課後や休日等を利用して当館を訪れ学芸員を質問攻めにし、自分たちの課題を追究していった。学芸員との会話は課題を越え、様々な話題に広がり、子供たちの興味・関心が一層広がったようである。なかには、その後の当館の事業にも積極的に参加する児童も出てきた。生涯学習の基礎はこのようなところから築かれていくのではないだろうか。いずれにせよ、子供たちは自分たちの課題を自分たちの方法でまとめ発表し合っていた。

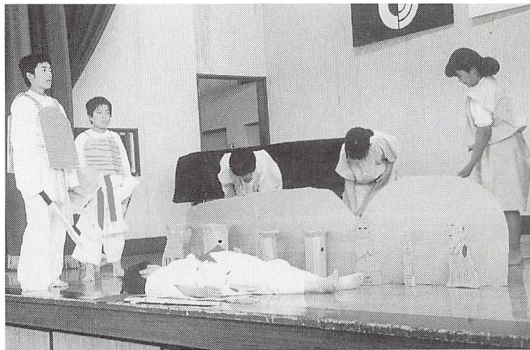
また、「古墳文化」についての理解を一層深めてもらおうと、当館が平成7年度に公開した古代劇「さきたま物語ー古墳ができるまでー」を子供たちなりにアレンジし、演じてもらった。この古代劇は、鉄剣の作者ヲワケの臣をさきたまの豪族として設定し、大和の大王に仕え、任務を終え帰還し、戦争で死に古墳が造られるまでを物語としたものである。直接子供たちに指導を加えることはできなかったが担当教師を通しアドバイスをさせていただいた。古代劇グループは、小道具をダンボールで作り、熱心に練習に励んでいたという。

発表の当日参観させていただいたが、子供たちは当館が貸し出した衣装を身に着け、熱演していた。演じる側も見る側もスムーズに「古墳文化」を理解していったようである。演じた子供たちの感想は別掲の通りであり、今回見る側に回っていた子供たちからは、「次回は出演したい」との声が上がっていた。なお、この古代劇の様子は新聞（別掲）でも報道された。

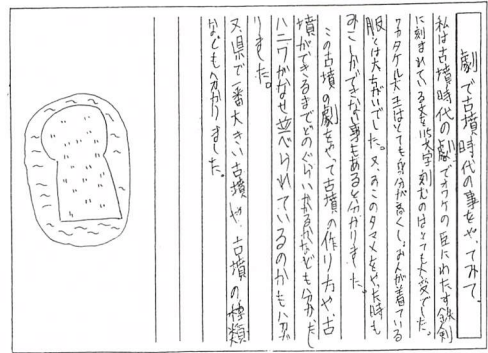


模造紙で発表する児童たち

この実践は、テーマ「地域の教材を活用して、生き生きと活動する児童を育てるための指導の工夫」に十分に迫れるものであった。また、中央教育審議会第一次答申が『「生きる力」の重要な要素である』と規定している「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」の育成につながる実践でもあった。子供たちの中には、その後も度々当館を訪れ、学芸員に質問を投げ掛けたり、当館の体験学習にも参加する児童もいる。当館が「学びの場」になっていることを嬉しく思とともに、改めて博物館等の役割の重要性を認識するものである。



古代劇を演ずる児童たち



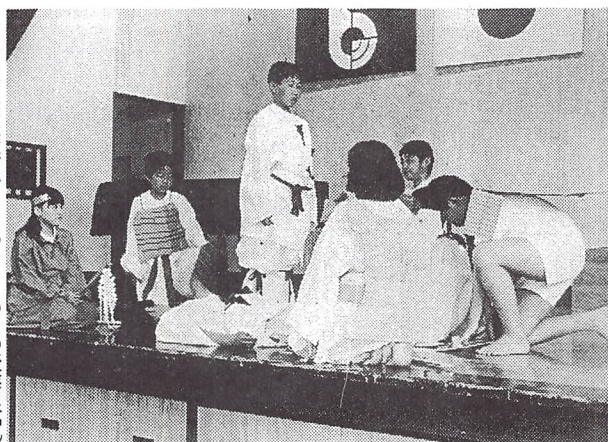
古代劇を演じた児童の感想

さきたま資料館と連携授業 古墳テーマに聞き取り調査

県立さきたま資料館と連携した社会科の特別授業が二十三日、川里村の屈巢小学校（高橋豊三校長）で行われ、子どもたちが同館学芸員から

の聞き取り調査など、まとめた研究の成果を発表した。古墳時代の学習に当たって同館を積極的に活用し、より充実した内容の授業を目指すもの。文部省の学習指導要領も地域の博物館、郷土資料館と学校との「博学連携」の方針を打ち出している。

この日の授業に臨んだのは六年一、二組の児童五十人。両クラスは八日に同館を見学、学芸員の渡辺勤主査から古墳や出土品について説明を受けた。その後、それぞれのテーマに基づいて、土、日曜日や放課後に同館を訪問し、学芸員から話を聞くなどの学



古代装束に身を包んだ子どもたちが上演した「さきたま物語 稲荷山古墳ができるまで」—屈巢小学校体育館

習を進めてきた。授業内容は調査の発表と古代劇の上演の二本立て。発表組は「古墳とは何か」「古墳、ほにわはなぜ作られたのか」といったテーマごとにグループで発表。それぞれ仮説を立てたうえで調べた成果を模造紙にまとめて披露した。古代劇の上演は歴史上の人物を演じることで理解を深めてもらう体験学習。昨年七月に同館職員らが上演したシナリオを子ども向けにアレンジ、衣装も貸し出した。子どもたちは土器やはやわななどの小道具を約一週間かけて準備。金錯銘鉄剣が出土した稲荷山古墳ができるまでをつづた「さきたま物語」を十八人が熱演した。資料館側で指導にあたった渡辺主査は「まず歴史に興味を持ってもらうことが大切。自分たちで調べた劇をもちたことが、次のステップになれば」と話していた。

川里
屈巢小
古代劇上演などで成果発表

(2) 中学校「選択社会」(行田市立埼玉中学校)の実践

中学校学習指導要領の「選択教科としての「社会」」には、



第3学年における選択教科としての「社会」においては、生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容について、分野間にわたる学習、自由研究的な学習、見学・調査、作業的な学習などの学習活動を学校において適切に工夫して取り扱うものとする。

とある。行田市立埼玉中学校の場合は、見学・調査をもとにした自由研究的な学習が展開されていた。選択教科であることから、また郷土の古墳群をテーマにしていることから学習内容に興味・関心を持つ生徒が多く、意欲的に活動していた。その主な学習活動は次の5項目であった。

- ①古墳調べ
- ②埴輪などの出土品調べ
- ③まが玉作り
- ④発表会
- ⑤古代劇づくり

当館の見学については、各自の学習課題を追究する場として利用された。それぞれが課題意識を持って臨んでいるため、当館はまさに学習の場となった。館側の役割は、生徒たちの課題解決への援助であった。生徒たちは、自らの課題を解決するとともに、新たな課題を見出してくれたものとする。それらをまとめた生徒たちは、①の「古墳調べ」及び②の「埴輪などの出土品調べ」の学習において、次のようなレポート(一部)を作成している。

★ (将軍山古墳) 調べ テーマ (将軍山の馬冢と杏葉)

 <p>馬冢(馬のかかど)</p>	 <p>杏葉</p>
<p>説明</p> <p>日本の2つしかない。(和歌山県・埼玉県) 将軍山古墳は明治21年石室が発掘された。 埴輪施設は厚板石や緑泥片岩で組まれた横穴式石室 である。その遺物は、小形、仿製鏡、三輪瓦、銅鏡、各 種武器、武器や馬具に渡って馬の頭部を保護する馬 冢が含まれている。</p> <p>〈馬冢〉…朝鮮半島で出土例があるが、中国や高麗 の壁土で作られる。韓国の出土例は在野の 後半の年代である。将軍山古墳の馬冢は約100 年間存在され、崩壊された。</p> <p>〈質問〉馬冢と杏葉は何に使われたか？ 馬冢…鉄板を馬の頭の前部に合わせて馬を かかどに当てるようにして馬の頭部を保護する 取り入れ作られたもの。</p>	

	<p>テーマ (はにわのイリュージョン →)</p>
 <p>土女 大形土師の女 土師の著土女 随調 土 土師の男</p>	
<p>説明</p> <p>埴輪は人物・動物などの形をした土製の人形。 埴輪は土製の人形。 人物は土製の人形は、七つ土、土の復活 を死にきり狂いで作った人々の土師像 ではないかと想像される。</p> <p>★ どうして「土製の人形」か。</p> <p>① → 土製の人形は、土製の人形は、土製の人形は、 土のイリュージョン。</p> <p>② → 土師の人形は、土師の人形は、土師の人形は、 次の代に土を引きついで儀式などの 物語を表現している。</p>	

生徒のレポート

③の「まが玉作り」については、1, で紹介した実践と同様に実施した。中学3年生ということもあり、個性的で表現力豊かな勾玉が出来上がった。④の「発表会」及び⑤の「古代劇作り」については3学期の学習内容とのことであった。

なお、同校の「選択社会」の生徒たちは、休業土曜日に当館が実施している「土曜おもしろ博物館—実感！古墳探検オリエンテリング—」にも参加している。日頃見慣れている古墳群であるが、改めて問題に挑戦しながらオリエンテリングし、より一層理解を深めてくれたようである。

生徒たちは、変化に富んだ多様な学習内容に各々が個性を発揮し、主体的に学習しており、「選択社会」の目的は達成されたものと考えている。



オリエンテリングする生徒たち

おわりに

以上、本年度の実践から「博学融合」の試みの一端を述べてきた。子供たちの授業中の呟きやその後の感想から、私は、子供たちの主体的な学習を促すうえで、「出前授業」や当館を活用した授業が極めて効果的であることに確信を得た。しかし、こうした授業は市町村立の館ならば全校で実施することも可能であるが、遠方では困難であり、ここに県立館としての難しさがある。県立館の役割としては、こうした実践を学校はもとより博物館等に紹介することによって、それぞれの地域における「博学融合」の促進を図ることではないだろうか。

生涯学習時代を迎え、第15期中央教育審議会は、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことが教育の基本とする教育の改革方向を提唱している。「ゆとり」とは、子供たちが主体的に考え、主体的に活動できる心と時間ではないだろうか。博物館等としては、子供たちの「ゆとり」が向けられるような魅力ある事業を展開するとともに、学校教育との連携を一層深め、「生きる力」を培う場の一つとなっていかなければならない。「博学連携」から「博学融合」の時代へ、博物館等の役割は大きい。

おわりに、今回の授業実践にご協力いただき、かつ貴重な資料や写真等をご提供いただいた行田市立埼玉中学校、同忍中学校、川里村立屈巢小学校、騎西町立高柳小学校、羽生市立手子林小学校、加須市立昭和中学校、越谷市立花田小学校、北本市立宮内中学校の先生方及び児童生徒の皆さんに心よりお礼申し上げます。